

子どもの心理的特徴に関する調査 2

— 5年生における自己意識と能力認知と社会的責任との関係 —

石王 敦子・落合 正行・井上 知子

はじめに

今日、学級崩壊、青少年の非行や犯罪、いじめなど、子どもに関わる問題は社会問題として大きくとりあげられている。そして、このような問題が議論されるときには、「昔に比べて子どもが変わった」という指摘のなされることが多い。

しかし、本当に子どもは変わったのだろうか？ 「子どもが変わった」というときの子どもは一体何を指しているのでしょうか？ 子どもが変化したと言うとき、集団としてそのような傾向を示すようになっているのか、それとも特別な個人の際だった行動を指しているのでしょうか？あるいは、昔は特殊な行動であった行動特徴を示す子どもの割合が、最近が増えてきたということの意味しているのでしょうか？ または、行動や心の特徴の種類によって、様々な様態を示すのでしょうか？ この意味合いの違いは、大変重要なことだと思われる。

確かに、子どもの変わり様は、実際のところさまざまな角度から検討する必要のあることだが、本研究では、まずは「子どもは本当に変わったのか、もし変わったのなら実際にどの様な事実として変わったのか」ということを、実証的なデータを基に検証することにした。この調査の対象は小学校5年生である。人はそれぞれ自己意識という自分についての考えや知識を持っている。小学校5・6年生頃になると、それまでは「私は～を持ってい

る」「私の身長は～である」など、自分の外面的特徴ばかりを自分の特徴としてあげていた子どもが、「私は恥ずかしがりやである」など、自分の内面的特徴をあげはじめる。すなわち自分の内面に意識が向き始める頃なのである。この時期の子どもを対象にして、自己の外面や他者に対する態度という、自己の外面への注意の側面をみた「公的自己意識」と、自己の内面、感情、気分など自己の内面に注意を向けやすい傾向を示す「私的自己意識」とを測定し、過去の調査結果との比較から、子どもの変化をみることにした。

調査1では、5・6年生を対象に、自己意識の他に、落合・石王(2007)で指摘されてきた行動特徴から、「自分の評価(主観的統制感)」「自分の管理(行動の自己統制)」、「ストレスに対する対処」を取り上げた。この調査2では、自己意識尺度に加えて、「児童用コンピテンス尺度」「社会的責任目標についての調査」をすることにした。

落合・石王(2007)は、現在の子どもの行動や心理的特徴をまとめている。それによると、学級崩壊でみられる子どもたちの主な特徴は、我慢ができない、規則が守れない、教師の指導に従わない、自分で考えることなく友達に同調する、自分の持ち物の管理ができないなどである。青少年の非行や犯罪では、「キレル」という言葉で代表されるように、すぐに暴力に訴える、感情のコントロールができないことに加えて、正高(2001)は、自分の気持ちを言葉であらわすことが苦手とい

うコミュニケーション能力の低さなどをあげている。また、いじめなどで攻撃的行動をとる子どもは、相手の気持ちを考えるという共感性が低いことや、暴力を有効な手段と考えていることなどが特徴としてあげられる。教室でおこるいじめでは、周りの子どもたちの傍観者の行動もいじめを助長することになる。しかし、いじめの加害者だった子どもが一転して被害者になったりすることもあり、その様相は複雑である。

このように、子どもの問題行動の背景には、「自分は～できる」「～には自信がある」という自己有能感がないため何かに打ち込むことがなく、いじめなど短絡的に結果が出る行動にはしって満足感を得たりすることがみられる。また、自分の都合だけを考えて人に迷惑をかけても平気というような行動もみられる。社会の中で、ルールを守って社会的役割への期待に応える行動ができないということでもある。そこで自己意識に加えて、これらを測定できるような調査を行うことにした。

それぞれの調査では、過去の調査との比較をして子どもの経年的変化をみるとともに、各テスト間の関係性をみることによって、現代の子どもの心理的特徴をより具体的に浮かび上がらせることができると考えた。

目的

本研究の目的は、現在の子どもの心理的特徴やその構造について実証的なデータを収集し、その特徴について検討することである。

方法

調査参加児

中津小学校・水尾小学校・太田小学校・葦原小学校に協力を頂いたことに感謝の意を表します。調査に参加した児童のうち、有効デ

ータ数は、下記の通りである。

表1 調査参加児の学年、性別内訳（人数）

	男	女	合計
5年生	81	73	154

調査内容

本研究で使用したテストは、3つの心理特性について調査したものであり、内訳は以下の通りである。

1 児童用自己意識尺度（小学5・6年生用）

桜井（1992）の児童用自己意識尺度（小学5・6年生用）を用いた。このテストで測定されている心理的特性は、公的自己意識と私的自己意識である。公的自己意識とは、自己の外面や他者に対する態度という自己の外面への注意の側面をみたものである。一方、私的自己意識とは、自己の内面、感情、気分など自己の内面に注意を向けやすい傾向をみるものである。

公的自己意識尺度は9項目からなり、私的自己意識尺度は10項目からなる。4件法で評定させた。項目は付表1に示している。

2 児童用コンピテンステスト

Harter（1982）が作製した尺度をもとに桜井（1983）が作製した尺度を使用した。学習領域、運動領域、社会（仲間関係）領域、自己価値（自尊感情）の4領域からなる。

テストは、学習コンピテンスが10項目、社会（仲間関係）コンピテンスが10項目、運動コンピテンスが10項目、自己価値（自尊感情）が10項目の40項目からなる。4件法で評定させた。項目は付表2に示している。

3 社会的責任目標についての調査

中谷（1996）の作成した社会的責任目標尺

度を使用した。ここでは、社会的責任を社会的ルールや役割への期待を守ることと定義している。このテストでは、規範遵守目標と向社会的目標の二つの下位尺度からなるものである。規範遵守目標とは、教室における明示的あるいは暗黙のルールを守り、規範に従おうとする目標であり、向社会的目標とは社会的、対人的な協力や援助をしようとする目標である。

テストは、向社会的目標が8項目、規範遵守目標が10項目、合わせて18項目からなる。5件法で評定させた。項目は付表3に示している。

結果

過去のデータとの比較（経年比較）

1 自己意識テスト

本結果と桜井（1992）の結果を比較すると、16年前の児童の自己意識の発達との比較が出来る。本研究結果を表2に、桜井の結果を表3に示しておく。

両者を比較すると、男女とも1992年に比べ

て公的自己意識は得点が低く、私的自己意識は高くなっている。

2 児童用コンピテンステスト

桜井（1992）のデータと本調査のデータを比較すると、4つのコンピテンス領域において、ほとんど変化がないことがわかる（表4）。桜井のデータは5、6年生424名のデータであり、しかも社会コンピテンスと自己価値には学年差が認められていた。6年生の平均値が高かったことを考えると、社会コンピテンスの平均値は、今日の子どもの方が少し高いくらいであり、子どもの自分の能力の評価に関しては、必ずしも今の子どもの方が低いことは示されなかった。このことは、集団としては少なくとも16年前の子どものと変化はないといえる。

3 社会的責任目標についての調査

中谷（1997）のデータとの比較を行った（表5）。5年生においては、向社会的目標の値に変化はないが、規範遵守目標に関しては、平均値が1997年に比べて5.4ポイント上昇し

表2 本調査の学年、性別平均値と標準偏差

		公的自己意識	私的自己意識
5年生男子	平均値	21.38	28.26
	標本標準偏差	5.89	6.178
5年生女子	平均値	23.86	28.16
	標本標準偏差	4.88	5.53
5年生	平均値	22.3143	27.8643
	標本標準偏差	5.5892	4.914

表3 桜井（1992）による学年別、性別の公的自己意識、私的自己意識得点

	5年生	
	男子(n=107)	女子(n=110)
	平均標準偏差	平均標準偏差
公的自己意識	26.14(7.04)	29.21(6.33)
私的自己意識	24.28(5.43)	23.96(5.31)

表4 児童用コンピテンステストの結果

	学習コンピ テンス	社会コンピ テンス	運動コンピ テンス	自己価値
5年生(2008)	24.54	28.21	26.11	23.32
	6.2	5.01	8.47	6.16
桜井(1992)	24.28	27.3	27.05	24.44
	6.28	5.75	8.07	6.34

表5 社会的責任目標についての調査結果

	向社会的目標	規範遵守目標
5年生(2008)	33.37	38.084
標準偏差	6.3985	7.2571
5年生(1997)	32.32	32.68
標準偏差	5.69	6.73
男(2008)	32.83951	37.03704
標準偏差	7.793357	7.802955
女(2008)	33.9589	39.24658
標準偏差	4.341142	6.454501
男(1997)	30.74	35.81
標準偏差	5.62	6.81
女(1997)	33.49	38.62
標準偏差	5.1	6.22

ている。このことは、11年前に比べて向社会的目標に関しては同じような意識であるが、規範遵守目標については高得点になってきており、より規範重視となってきていることを示している。

一方、男女の比較であるが、男子は、向社会的目標と規範遵守目標とも2ポイントほど上昇しているが、女子はほぼ同じ値となっている。

性差

次に2008年度のデータにもとづき、男女差を検討していく。

1 自己意識テスト

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、公的自己意識に関しては、男女に有意な差が見られた ($t=2.82$, $df=152$, $p<.001$)。平均値から、女子の方が高い得点を

示している。一方、私的自己意識に関しては、性別による違いが見られなかった ($t=0.100$, $df=152$, ns.)。

2 児童用コンピテンステスト

① 学習コンピテンス

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、学習コンピテンスに関しては男女に有意な違いが見られた ($t=3.159$, $df=152$, $p<.001$)。平均値から男子の方が高い得点を示している。

② 社会コンピテンス

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、社会コンピテンスに関しては男女に有意な平均値の違いが見られなかった。

③ 運動コンピテンス

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、運動コンピテンスに関しては男女差に有意な傾向が見られた ($t=1.969$, $df=152$, $.05<p<.10$)。平均値から男子の方が高い得点を示している。

④ 自己価値

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、自己価値に関しては男女差に有意な傾向が見られた ($t=1.085$, $df=152$, $.05<p<.10$)。平均値から男子の方が高い得点を示している。

3 社会的責任目標についての調査

① 向社会的目標

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、向社会的目標に関しては男女に有意な平均値の違いが見られなかった ($t=1.883$,

df = 152, ns.)。

② 規範遵守目標

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、規範遵守目標に関しては男女に平均値の違いに有意な傾向が見られた (t=1.903, df=152, .05<p<.10)。平均値から女子の方が高い得点を示している。

テスト間の関係

各テスト間の関係について、学年別、性別で相関係数を求めた。

1 5年生男子の結果

5年生男子に実施した各テスト間の相互相関係数を求め、無相関との検定を行った。その結果を表6に示しておく。表から、公的自己意識に関しては、私的自己意識に無相関ではないという結果が見られる。それ以外の項目に関しては、公的自己意識には関係はないことが示された。私的自己意識に関しては、公的自己意識以外に学習コンピテンス、自己価値、向社会的目標、規範遵守目標に無相関ではない関係が見られた。尤も、高い相関係数は認められておらず、低い関係しか認められてはいない。しかし、運動コンピテンスと社会コンピテンスに関しては、関係がないことが示された。

コンピテンス間では学習コンピテンスと運動コンピテンス間に関係は認められていないが、それ以外のコンピテンス間には中くらい

もしくは低い関係が認められている。社会的責任目標との関係では、学習コンピテンスとには中くらいの相関関係が認められているが、社会コンピテンスと運動コンピテンスに関しては社会的責任とに関係は認められていない。

2 5年生女子の結果

5年生女子に実施したテスト間の相互相関係数を求め、無相関との検定を行った。その結果を表7に示しておく。表から、公的自己意識に関しては私的自己意識に無相関ではないという結果が見られている。それ以外の項目に関しては、公的自己意識とには関係はないことが示された。私的自己意識に関しては、社会コンピテンスのみに関係を見いだすことが出来なかった。学習コンピテンス、運動コンピテンス、自己価値、向社会的目標、規範遵守目標に無相関ではない関係が見られた。尤も、高い相関係数は認められておらず、学習コンピテンス、運動コンピテンスには低い関係しかみられず、また向社会的目標、規範遵守目標については中くらいの相関が認められている。

コンピテンス間ではすべてのコンピテンス間に関係は認められている。社会的責任目標との関係では、学習コンピテンスは両方の目標と相関が見られるが、他の学習コンピテンスに関しては、向社会的目標との間には関係はあるが、規範的目標とに関係は認められていない。

男女の比較では、ほぼ同じ関係が見られて

表6 5年生男子のテスト間の相関係数と無相関との検定結果 (* : 5% ** : 1%)

	公的自己意識	私的自己意識	学習コンピテンス	社会コンピテンス	運動コンピテンス	自己価値	向社会的目標	規範遵守目標
公的自己意識	1	0.438	0.0205	-0.121	-0.1825	-0.2128	-0.0483	0.1007
私的自己意識	**	1	0.4065	0.216	0.2139	0.2414	0.3015	0.2874
学習コンピテンス		**	1	0.394	0.1905	0.5863	0.4736	0.4704
社会コンピテンス			**	1	0.4309	0.6786	0.3798	0.1655
運動コンピテンス				**	1	0.5074	0.1846	0.03
自己価値		*	**	**	**	1	0.3878	0.2429
向社会的目標		**	**	**		**	1	0.4159
規範遵守目標		**	**			*	**	1

表7 5年生女子のテスト間の相関係数と無相関との検定結果（*：5% **：1%）

	公的自己意識	私的自己意識	学習コンピテンス	社会コンピテンス	運動コンピテンス	自己価値	向社会的目標	規範遵守目標
公的自己意識	1	0.2899	0.2576	-0.1943	0.1212	-0.0382	0.0633	-0.0223
私的自己意識	*	1	0.4376	0.0284	0.2996	0.2459	0.4232	0.4813
学習コンピテンス	*	**	1	0.2926	0.4533	0.6003	0.3383	0.3471
社会コンピテンス			*	1	0.489	0.5986	0.2561	0.0169
運動コンピテンス		*	**	**	1	0.5516	0.383	0.1582
自己価値		*	**	**	**	1	0.3006	0.2236
向社会的目標		**	**	*	**	**	1	0.6016
規範遵守目標		**	**				**	1

いるが、私的自己意識と学習コンピテンス、それに自己価値に男女で違いが見られている。

自己意識と他のテストとの関係

二つの自己意識と他のテストとの関係について分析した。

1 公的自己意識

公的自己意識に関して、それぞれ男子、女子の平均値で高群低群に分け、他のテストの平均値との違いについて2要因（性と高低）の分散分析を行った。

学習コンピテンスに関しては、性のみ主効果が認められた（ $F(1/149) = 13.635, P < .001$ ）。平均値から、男子の方が女子より高い得点を示した。

社会コンピテンスに関しては、どの要因にも有意差は認められなかった。

運動コンピテンスに関しては、性と公的自己意識の高低にそれぞれ主効果の傾向が認められた（性： $F(1/149) = 3.033, .05 < P < .10$ 、意識高低： $F(1/149) = 3.600, .05 < P < .10$ ）。平均値から、男子の方が女子より高い得点を示し、公的自己意識高群が運動コンピテンスに高い平均値を示した。交互作用は、認められなかった。

自己価値に関しては、性のみ主効果が認められた（ $F(1/149) = 8.537, P < .001$ ）。平均値から、男子の方が女子より高い得点を示した。

向社会的目標に関しては、どの要因にも有意差は認められなかった。

規範的遵守目的に関しては、性に主効果が認められた（性： $F(1/149) = 4.892, P < .05$ ）。平均値から、女子の方が男子より高い得点を示している。また、交互作用に有意な傾向が認められ（ $F(1/149) = 3.075, .05 < P < .10$ ）、男子公的自己意識低群の成績が他の3群に比べて低い。

2 私的自己意識

私的自己意識に関して、それぞれ男子、女子の平均値で高群低群に分け、他のテストの平均値との違いについて2要因（性と高低）の分散分析を行った。

学習コンピテンスに関しては、性と私的自己意識の高低にそれぞれ主効果が認められた（性： $F(1/149) = 11.123, P < .005$ 、意識高低： $F(1/149) = 13.877, P < .001$ ）。平均値から、男子の方が女子より高い得点を示し、私的自己意識の高い群が学習コンピテンスに高い平均値を示した。交互作用は、認められなかった。

社会コンピテンスに関しては、私的自己意識の高低のみ主効果が認められた（ $F(1/149) = 5.440, P < .05$ ）。平均値から、私的自己意識の高群が低群より高い得点を示した。

運動コンピテンスに関しては、性と私的自己意識の高低にそれぞれ主効果が認められた（性： $F(1/149) = 4.357, P < .05$ 、私的自己意識高低： $F(1/149) = 11.146, P < .005$ ）。平

均値から、男子の方が女子より高い得点を示し、私的自己意識の低い群が運動コンピテンスに高い平均値を示した。交互作用は、認められなかった。

自己価値に関しては、性と私的自己意識の高低にそれぞれ主効果が認められた（性： $F(1/149) = 3.844, .05 < P < .10$, 私的自己意識高低： $F(1/149) = 6.791, P < .05$ ）。平均値から、男子の方が女子より高い得点を示し、私的自己意識の高い群が自己価値に高い平均値を示した。交互作用は、認められなかった。

向社会的目標に関しては、私的自己意識の高低のみに主効果が認められた（ $F(1/149) = 10.835, P < .005$ ）。平均値から、私的自己意識の高群が低群より高い得点を示した。

規範遵守目標に関しては、性と私的自己意識の高低にそれぞれ主効果が認められた（性： $F(1/149) = 3.550, .05 < P < .10$, 私的自己意識高低： $F(1/149) = 11.046, P < .005$ ）。平均値から、女子の方が男子より高い得点を示し、私的自己意識高群が規範遵守目標に高い平均値を示した。交互作用は認められなかった。

公的自己意識と私的自己意識の組み合わせによる結果

公的自己意識の高低群と私的自己意識の高低群と男子、女子の組み合わせによる、各テストの平均値の違いについて3要因の分散分析を行った。

学習コンピテンスに関しては、性と私的自己意識の要因に主効果が認められた（性： $F(1/146) = 12.444, P < .001$, 私的自己意識高低： $F(1/146) = 11.825, P < .001$ ）。平均値から、男子の方が女子より高い得点を示し、私的自己意識高群が学習コンピテンスに高い平均値を示した。交互作用は認められなかった。

社会コンピテンスに関しては、公的自己意識と私的自己意識とに主効果が認められた

（公的自己意識： $F(1/146) = 3.614, .05 < P < .10$, 私的自己意識高低： $F(1/146) = 5.371, p < .05$ ）。平均値から、公的自己意識低群の方が高群より社会コンピテンスに高い得点を示し、私的自己意識高群が社会コンピテンスに高い平均値を示した。交互作用はなかった。

運動コンピテンスに関しては、性と公的自己意識、私的自己意識の3つの要因に主効果が認められた（性： $F(1/146) = 2.882, .05 < P < .10$, 公的自己意識： $F(1/146) = 4.907, p < .05$, 私的自己意識高低： $F(1/146) = 14.164, P < .001$ ）。平均値から、男子の方が女子より高い得点を示し、公的自己意識低群の方が高群より運動コンピテンスに高い得点を示し、私的自己意識高群が運動コンピテンスに高い平均値を示した。交互作用は認められなかった。

自己価値に関しては、性と公的自己意識、私的自己意識の3つの要因に主効果が認められた（性： $F(1/146) = 3.075, .05 < P < .10$, 公的自己意識： $F(1/146) = 5.315, p < .05$, 私的自己意識高低： $F(1/146) = 9.235, P < .005$ ）。平均値から、男子の方が女子より高い得点を示し、公的自己意識低群の方が高群より自己価値に高い得点を示し、私的自己意識高群が自己価値に高い平均値を示した。交互作用は認められなかった。

向社会的目標に関しては、私的自己意識の要因にのみ主効果が認められた（ $F(1/146) = 10.647, P < .005$ ）。平均値から、私的自己意識高群が向社会的目標に高い平均値を示した。交互作用は認められなかった。

規範遵守目標に関しては、性と私的自己意識の要因に主効果が認められた（性： $F(1/146) = 3.014, .05 < P < .10$, 私的自己意識高低： $F(1/146) = 10.274, P < .005$ ）。平均値から、女子の方が男子より高い得点の傾向を示し、私的自己意識高群が規範遵守目標に高い平均値を示した。交互作用は認められなかった。

考察

過去のデータとの比較（経年比較）

1 自己意識テスト

まず過去とのデータを比較してみる。1992年には、男女ともに公的自己意識の方が私的自己意識よりも得点が高いが、本調査では、男女ともに公的自己意識は私的自己意識よりも得点が低くなっている。桜井（1992）によれば、公的自己意識とは、自己の外面や他者に対する態度という自己の外面への注意の側面をみたものであり、私的自己意識とは、自己の内面、感情、気分など自己の内面に注意を向けやすい傾向をみるものである。したがってこの16年間に、子どもたちは、人にどう思われているか、どう見られているかを考えるよりも、自分の内面に注意を向けやすくなった傾向がうかがえる。公的自己意識の低下は、電車の中での食事や化粧などに代表されるように「人に迷惑をかけなければ何をしてもよい」という風潮が社会に広まっていることと無関係ではないだろう。しかし、私的自己意識の高まりは必ずしも悪いことではない。桜井（1992）によれば、私的自己意識は、自分の内面に注意を向けることが出来る児童の方が発達し、自分をよりよく認識できるために、そうでない児童より対人不安傾向が低く、自己顕示欲が強く（良い意味での自己主張）、孤独感はそれほどなく、自分に自信をもって行動している（コンピテンスが高い）という。ただ、自信が本当に社会で意味を持つていくためには、自分の有能感だけではなく他者からの視点が必要であるので、両方のバランスが大事ではないかと考えられる。

2 児童用コンピテンステスト

桜井（1992）のデータと比較しても、ほとんど得点差はみられない。コンピテンス（有能感）に関しては、学習・社会（仲間関係）・運動・自己価値（自尊感情）のどの領域にお

いても、子どもたちの自分に関する評価は変わっていないといえる。自己意識のテストでは、自分の内面に注目する傾向が高くなっていることが伺えたが、それがそのまま自分の評価には直結していないようである。

3 社会的責任目標についての調査

中谷（1997）年との比較を行った。向社会的目標の値に変化はないが、規範遵守目標に関しては、平均値が1997年に比べて5.4ポイント上昇している。このことは、11年前に比べて向社会的目標に関しては同じような意識であるが、規範遵守目標については高得点になってきており、より規範重視となってきていることを示している。向社会的行動とは、他者に利益をもたらす行動であり、特に外的な報酬や返礼を期待せず、自発的に行われることが多い。そのような行動については、子どもたちの意識は10年前とほとんど変わっていないことになる。新聞の投書欄に、若者に親切にされて感激した老人が「彼らは見かけとは全く違う」と投稿しているのを時々見かけるが、人に親切にしたり困っている人を助けたりという行動に関しては、昔とほとんどかわっていないことになる。規範遵守目標に関しては、10年前よりも上昇している。学級崩壊等が社会問題になってきて、子どもたちの規範意識が薄れているとの指摘がいろいろなところでなされるようになったことから、教育現場や家庭でのしつけの変化があり、それらが影響を与えているのかもしれない。一方、男女の比較であるが、男子は、向社会的目標と規範遵守目標とも2ポイントほど上昇しているが、女子はほぼ同じ値となっている。

性差

次に2008年度のデータにもとづき、男女差を検討した結果について考察していく。

1 自己意識テスト

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、公的自己意識に関しては、女子の方が有意に高い得点を示している。一方私的自己意識に関しては、性別による違いが見られなかった。この結果には、服装や髪型など、女子の方が他者の視線を意識する機会が多いことも反映されていると考えられる。

2 児童用コンピテンステスト

① 学習コンピテンス

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、男子の方が有意に高い得点を示していることがわかった。学習に関しては、男子の方が自己有能感を感じているといえる。

② 社会コンピテンス

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、社会コンピテンスに関しては男女に有意な差は見られなかった。

③ 運動コンピテンス

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、男子の方が高い得点を示していることがわかった。運動に関しては、男子が有能感を感じ自信をもって取り組んでいることがわかる。

④ 自己価値

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、男子の方が高い得点を示している。男子の方が、自分に関する自信が高く、自分に価値を感じて過ごしていることがわかる。

以上、児童用コンピテンステストの性差についてまとめると、学習コンピテンス・運動コンピテンス・自己価値について男子の値の方が有意に高く、女子にくらべて有能感を持って過ごしていることがわかった。

3 社会的責任目標についての調査

① 向社会的目標

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、向社会的目標に関しては男女に有意

な平均値の違いが見られなかった。人に親切にしたり、人を助けてあげたりという行動について、男女差はなかった。

② 規範遵守目標

性別による平均値の違いをt検定で検討した結果、規範遵守目標に関しては女子の方が高い得点を示しており、男女に有意な傾向差がみられた。女子の方が規則を守ったり規範意識に敏感であったりすることを示しているが、これは、今回の調査で女子の方が公的自己意識が高かったこととも関係していると考えられる。

テスト間の関係

各テスト間の関係について、学年別、性別で相関係数を求めた結果を考察する。

1 5年生男子の結果

5年生男子に実施した各テスト間の相互相関係数を求め、無相関との検定を行った。公的自己意識に関しては、私的自己意識に無相関ではないという結果が見られた以外は、どの項目も関係はないことが示された。私的自己意識に関しては、公的自己意識以外に学習コンピテンス、自己価値、向社会的目標、規範遵守目標に無相関ではない関係が見られた。尤も、高い相関係数は認められておらず、低い関係しか認められてはいない。しかし、運動コンピテンスと社会コンピテンスに関しては、関係がないことが示された。私的自己意識は、自分の内面に注目する傾向が高いことでもあるので、自分自身の有能感と関係が見られることは納得できる。

コンピテンス間では学習コンピテンスと運動コンピテンス間に関係は認められていないが、それ以外のコンピテンス間には中くらいもしくは低い関係が認められている。「文武両道」という言葉で表されるように、昔から両立は難しいと認識されているが、現代でも

運動面と学習面との有能感が関わっていないというのは興味深い。

規範遵守目標と向社会的を含む社会的責任目標については、学習コンピテンスとには中くらいの相関関係が認められているが、運動コンピテンスについては両者とも関係が見られなかった。社会コンピテンスについては、規範遵守目標との関連が認められなかった。

2 5年生女子の結果

5年生女子に実施したテスト間の相互相関係数を求め、無相関との検定を行った。公的自己意識に関しては私的自己意識に無相関ではないという結果が見られた。その他には、学習コンピテンスとの関係がみられた。私的自己意識に関しては、社会コンピテンスのみに関係を見いだすことが出来なかった。学習コンピテンス、運動コンピテンス、自己価値、向社会的目標、規範遵守目標に無相関ではない関係が見られた。尤も、高い相関係数は認められておらず、運動コンピテンス・自己価値には低い関係しかみられず、また学習コンピテンス、向社会的目標、規範遵守目標については中くらいの相関が認められている。

コンピテンス間ではすべてのコンピテンス間に関係は認められている。社会的責任目標との関係では、学習コンピテンスは両方の目標と相関が見られるが、他の学習コンピテンスに関しては、向社会的目標との間には関係はあるが、規範的目標との関係は認められていない。また運動コンピテンスは、社会的責任目標の両者と関連がみられない。

男女の比較では、ほぼ同じ関係が見られているが、私的自己意識と学習コンピテンス、それに自己価値に男女で違いが見られている。学習コンピテンスも自己価値も、男子の方が有意に高い得点であったので、その得点差が関わる要因の違いを反映している可能性はあるといえる。

自己意識と他のテストとの関係

二つの自己意識と他のテストとの関係について分析したものについて考察する。

1 公的自己意識

公的自己意識に関して、それぞれ男子、女子の平均値で高群低群に分け、他のテストの平均値との違いについて2要因（性と高低）の分散分析を行った。

学習コンピテンスに関しては、男子の方が女子より高い得点を示した。社会コンピテンスに関しては、どの要因にも有意差は認められなかった。運動コンピテンスに関しては、男子の方が女子より高い得点を示し、公的自己意識高群が運動コンピテンスに高い平均値を示した。自己価値に関しては、男子の方が女子より高い得点を示した。向社会的目標に関しては、どの要因にも有意差は認められなかった。規範的遵守目標に関しては、女子の方が男子より高い得点を示した。また、男子公的自己意識低群の成績が他の3群に比べて低かった。

2 私的自己意識

私的自己意識に関して、それぞれ男子、女子の平均値で高群低群に分け、他のテストの平均値との違いについて2要因（性と高低）の分散分析を行った。

学習コンピテンスに関しては、男子の方が女子より高い得点を示し、私的自己意識高群が学習コンピテンスに高い平均値を示した。社会コンピテンスに関しては、私的自己意識高群が低群より高い得点を示した。運動コンピテンスに関しては、男子の方が女子より高い得点を示し、私的自己意識の低い群が運動コンピテンスに高い平均値を示した。自己価値に関しては、男子の方が女子より高い得点を示し、私的自己意識高群が自己価値に高い平均値を示した。向社会的目標に関しては、

私的自己意識高群が低群より高い得点を示した。規範遵守目標に関しては、女子の方が男子より高い得点を示し、私的自己意識高群が規範遵守目標に高い平均値を示した。

以上自己意識についてまとめると、公的自己意識よりも私的自己意識の方が有能感や社会的責任目標に影響を与えていることがわかる。有能感や社会的責任目標の両方ともが、他者からの評価よりも自分を見つめて自分で判断するものであるため、関連がみられるのだと考えられる。しかし運動コンピテンスについては、公的自己意識が高く私的自己意識の低い群が高い得点を示していることから、運動能力はある程度客観的なものであることから、内面に注目する特性とはあまり関わらないといえる。

公的自己意識と私的自己意識の組み合わせによる結果

公的自己意識の高低群と私的自己意識の高低群と男子、女子の組み合わせによる、各テストの平均値の違いについて3要因の分散分析を行った。

学習コンピテンスに関しては、男子の方が女子より高い得点を示し、私的自己意識高群が学習コンピテンスに高い平均値を示した。社会コンピテンスに関しては、公的自己意識低群の方が高群より社会コンピテンスに高い得点を示し、私的自己意識高群が社会コンピテンスに高い平均値を示した。運動コンピテンスに関しては、男子の方が女子より高い得点を示し、公的自己意識低群の方が高群より運動コンピテンスに高い得点を示し、私的自己意識高群が運動コンピテンスに高い平均値を示した。交互作用は認められなかった。自己価値に関しては、男子の方が女子より高い得点を示し、公的自己意識低群の方が高群より自己価値に高い得点を示し、私的自己意識高群が自己価値に高い平均値を示した。向社

会的目標に関しては、私的自己意識高群が向社会的目標に高い平均値を示した。規範遵守目標に関しては、女子の方が男子より高い得点の傾向を示し、私的自己意識高群が規範遵守目標に高い平均値を示した。

以上の結果をまとめると、私的自己意識の高い群が、学習コンピテンス・社会コンピテンス・運動コンピテンス・自己価値等の各有能感が高く、向社会的目標や規範遵守目標の得点も高いことがわかる。公的自己意識低群が、社会コンピテンスと運動コンピテンスに高い得点を示したことは、これらは自己の内面を考えなくてもある程度客観的に結果がでる指標の可能性はある。

総合考察

さまざまな分析を行った結果、私的自己意識高群は、学習コンピテンス・社会コンピテンス・運動コンピテンス・自己価値等の各有能感が高く、向社会的目標や規範遵守目標の得点も高いことがわかった。16年前の結果と比べると、子どもたちの私的自己意識が高くなっていることは、各自の有能感を高め社会的責任目標も高めている可能性がある。そのように考えると、決して子どもが昔と比べてすべて悪くなっているとはいえないのではないだろうか。今回の調査で、自己意識が16年前の調査と比べて低かったことは、質問紙の内容が外見にかたより、現代社会の風潮にあわなかったとも考えられる。現代では、「人にどう見られるか」より「自分がどうしたいのか」が大事だとされていることが多い。個性の尊重が叫ばれ、外見や動作はもちろんのこと、意見などもあえて他人に合わせようとしなくてもいいと考えられている節がある。「人に迷惑さえかけなければよい」とか「ナンバーワンよりオンリーワン」と言われ、自分の評価は自分でするだけになってしまっている。時代によって、「他者を意識する」こ

とについての価値観が変化したこともあげられるだろう。ただ、自分の評価が社会で認められていくためには、自分の評価に客観的な裏付けが必要であり、そのためには公的自己意識もある程度必要であると考えられる。両者のバランスが大事なのではないだろうか。

子どもの変化には、社会の風潮などの社会的環境も影響を与える。昔と比べて地域や家庭の教育力が変化したこともあるだろう。それらを含めて、それらとの相互作用を考慮しながら子どもの変化を見ていく必要があるだろう。

引用文献

- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.
- 中谷素之 1996 児童の社会的責任目標が学業成績に影響を及ぼすプロセス *教育心理学研究*, 44, 389-399.
- 落合正行・石王敦子 2007 現在の子どもの行動および心理的特徴—原因とその対処法への基礎的資料— 追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要, 2, 29-46.
- 正高信男 2001 「キレル」心と幼児体験 *心理学ワールド*14, 17-20. (社)日本心理学会
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成 *教育心理学研究*, 31, 245-249.
- 桜井茂男 1992 小学校高学年生における自己意識の検討 *実験社会心理学研究* 32, 85-94.

付表 1 児童用自己意識尺度項目

1. おとなが自分のことをどう思っているか、気になりますか
2. かみがたや服そうには、気をつかいますか
3. 人が見ていると、自分をよく見せようとしてしまいますか
4. 自分についてのうわさが気になりますか
5. みんなの前で何かするとき、自分のどうさやかっこうが気になりますか
6. 何かしているとき、みんなが自分を見ているような気がしますか
7. 自分が他の人にどう思われているか、気になりますか
8. はじめて会った人には、なるべく自分のよいところばかりを見せようと、努力しますか
9. さんせい、反対を決めるとき、手をあげている人が多い方に、自分も手をあげてしまうことが多いですか
10. いま、自分がどんな気持ちなのか、考えることがありますか
11. 自分のしたことや言ったことを、あとから反省してみることがありますか
12. ほかの人を見るように、自分のことを考えてみる必要がありますか
13. 気分がかわると、すぐに自分で気がつきますか
14. 自分がほんとうにしたいことは何だろうかと、考えますか
15. 自分のことを、じっくり考えてみる必要がありますか
16. 自分の考えを、はっきりさせておきたい方ですか
17. みんなと意見がちがっても、自分はぜったいこう思う、と言うことがありますか
18. ものごとを、あまりじっくり考えない方ですか
19. 自分が正しいと思ったことは、やりとげようとしますか

付表2 児童用コンピテンステスト項目

1. 勉強は、クラスの中で、できる方ですか
2. 勉強は、にがてですか
3. 頭は、よい方だと思えますか
4. せいせきは、悪い方だと思えますか
5. 宿題は、みじかい時間でやり終えることができますか
6. じゅぎょうが、よくわかりますか
7. 先生のしつもんには、答えられないことが多いですか
8. むずかしい問題にも、ちょうせんしてみますか
9. テストでは、たいてい良いせいせきを取れますか
10. じゅぎょう中、自分の意見を、自信を持って、発表できますか
11. 友だちは、たくさんいますか
12. クラスの中では、にんきものだと思えますか
13. 友だちに、よくいじわるをされますか
14. 自分が学校を休んでも、みんなは、あまりしんぱいしてくれないだろうと思えますか
15. あたらしい友だちをつくるのは、がんとんですか
16. 友だちは、よくあそびにさそってくれますか
17. クラスの中で、自分は、いなくてはならない人だと思えますか
18. 友だちには、すかれていますか
19. クラスの人は、あまり自分をあいてにしてくれないですか
20. もし、転校することになったら、クラスの人は、かなしんでくれると思えますか
21. 運動はとくいな方ですか
22. はじめてのスポーツでも、うまくできる自信がありますか
23. 運動の大会では、よく選手にえられますか
24. 運動は、さんかするよりも、みている方がすきですか
25. あたらしいスポーツは、すぐやってみたくありませんか
26. 体育の時間は、きらいですか
27. スポーツは、にがてですか
28. 運動では、友だちにまけないと思えますか
29. クラスの中でも、運動ができる方だと思えますか
30. 運動をしているところを、あまり人に見られたくないですか
31. 自分に、自信がありますか
32. たいていのことは、人よりうまくできると思えますか
33. 自分には、人にじまんでできるところがたくさんあると思えますか
34. 何をやってもうまくいかないような気がしますか
35. 今の自分に、まんぞくしていますか
36. 自分はきっと、えらい人になれるとおもいますか
37. 自分は、あまり役に立たない人間だと思えますか
38. 自分の意見は、自信をもって言えますか
39. 自分には、あまりいいところがないと思えますか
40. しっばいをするのではないかと、いつもしんぱいですか

付表3 社会的責任目標についての項目

1. がっかりしている人がいたら、なぐさめたり、はげましてあげようと思います
2. けがをしたり、ぐあいの悪い人がいたら、保健室につれていこうと思います
3. 友達が何かにかまっていたら、手助けしようと思います
4. えんぴつや消しゴムをわすれた人には、自分のものをかしてあげようと思います
5. 自分が前にといたことがある問題がわからない友達がいいたら、その問題をとく手助け をしてあげようと思います
6. 勉強のわからない人には、教えてあげようと思います
7. 教科書をわすれた人がいたら、自分のものを見せてあげようと思います
8. 友達から何かをたのまれたら、それをやってあげようと思います
9. 友達としゃべりたくなっても、授業中はがまんするようにします
10. 授業中につかれてきても、授業の終わりまでは先生の話をよく聞くようにします
11. めんどうだと思っても、当番の仕事があるときには、それをちゃんとやるようにします
12. 授業中は、他の人のじゃまにならないようにします
13. 宿題をやらずに学校に行くことがあってもよいと思います
14. 授業で先生にやるようにいわれたことは、めんどうでもちゃんとやるようにします
15. 自習時間ならば、友達とおしゃべりしてもいいと思います
16. クラスで自分が受け持ったことは、ちゃんとやるようにします
17. 人の悪口を言わないように気をつけます
18. 学校のきまりは、すこしくらいなら守らなくてよい、と思います